

## 源氏物語における類聚性

高 木 和 子

『源氏物語』は、光源氏の恋愛遍歴の物語として知られている。たしかに、父の寵愛する妃である藤壺や、その姪にあたる紫の上、最初の正妻である葵の上、そのほか六条御息所、朧月夜、花散里など、光源氏の関わる女君たちは数多く多彩である。しかし、それらの女君との交渉のエピソードの一つ一つがどのように積み重なり、いかなる因果関係をもって結ばれているのかを理解するのは容易ではない。おそらくそれは、系図上の人間関係の理解が複雑であることに加えて、同一の登場人物の呼称がしばしば変更されることや、場面が転々として脈絡が見えにくいところ、似たエピソードや人間関係が何度も繰り返し描かれるところなどに起因しているのだろう。中でも、これでもかというほどに「密通」が繰り返し描かれるにもかかわらず、現代人から見れば当然にあってしかるべきと思われる罪悪感が当事者たちに乏しいことなども、今日の我々には理解の及ばぬ縁遠い物語と感じさせるゆえんの一つであろう。

このように、複雑な筋立て、転々とする場面構成、繰り返しの多い展開は、どのように必然化されているのか。ここでは物語の類聚性といった観点から論じてみたいと思う。

### 一 好色な男主人公の物語の伝統

光源氏の女性遍歴を理解する際に、平安時代の歴史的事実に還元しようとするのは、必ずしも有効ではない。平安時代の結婚は一夫多妻とされてきたが、近年は正妻とそれ以外の妻の間には格の差があることが明らかにされてきた<sup>(1)</sup>。またたとえば『源氏物語』に先立って成立した『蜻蛉日記』に見られる藤原道綱母の女藤原兼家の女性関係にしても、九人ほど数えられる女たちとの関係には時間差があり、同時的には二、三人程度だったとも指摘されている<sup>(2)</sup>。『源氏物語』中の男女の関係とても、同時に進行する関係は必ずしも多くはないが、それにしても、歴史的現実とは異なる物語としての虚構だと理解するのがまずは穏当であろう。

そのような虚構の原型を辿るならば、古代の神話におけるスサノオノミコトやオホクニヌシといった色好みの英雄が思い浮かぶ。往々にして苦難の旅を重ねる彼らは、その旅の過程で新たな土地に到り着くと新たな女に出会い、関係を結ぶ。女との関係が土地の征服を象徴的に物語するような格好なのである<sup>(3)</sup>。こうした神話における主人公の形象がいかんにして平安朝の物語に流れ込んだのか、文献上の影響なのか口承的な伝播によるのかは十分に定かではないが、平安朝の物語に影響を及ぼしていることはまず疑いないだろう。昔男の恋の数々を集めた体の『伊勢物語』、そのパロディかともいえる『平中物語』、『落窪物語』の叙述からその存在が知られる今日は散逸した『交野少将物語』など<sup>(4)</sup>、男の恋の遍歴が中軸になった体裁の物語は少なからずあった。

とはいえ、平安朝の恋物語における男主人公は、古代の神話の英雄のように雄々しく猛々し

くはない。高貴な出自でありながら権力の中樞や社会的な栄達から追いやられ、風流や数寄に情熱を傾けて日々の憂いを晴らすに過ぎない。恋の遍歴もそのような風流や数寄の一齣に過ぎないかのようなのである。そしておおむねそれらの主人公たちは、恋の遍歴を重ねることですます社会的栄達から遠のく結果となる。

『伊勢物語』は、在原業平（825—880）を主人公に擬する物語であるが、まさにそのような権力からの逸脱と風流を描く物語である。さまざまな恋の小話がある一方で、社会的栄達から疎外され逸脱した男達が惟喬親王を囲んで花を賞美し、和歌を詠んで共感を交わし合う。この物語の多くの要素を貪婪に吸収した『源氏物語』の場合も、確かに光源氏は父桐壺院没後には不遇期を過ごす。そこには、頭中将らとの韻塞に興じ（賢木巻）、須磨の地では漢詩を作り、頭中将も須磨まで訪問する（須磨巻）など、不遇期を共にする男達の共感が描かれるものの、光源氏はやがて都に復帰し、ついには准太上天皇という歴史に例を見ない地位に昇る。好色の不始末による不遇という平安朝の従来の好色物語の主人公像を克服して、多くの恋を通過しつつも社会的栄達を遂げる、新しい主人公像が達成されたと評されるゆえんであろう<sup>(5)</sup>。

『伊勢物語』は短編の累積であるために、個々の小話は、一面では緩やかな長編的な脈絡を抱えつつも、一面ではきわめて独立的、自律的な物語となっている。初段に「むかし、男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり」とあるように、元服まもない男が恋に惑乱する物語から始まり、最後は「つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを」と死を予感する章段で終わる。あたかも男の生涯を辿るような体裁であり、また実在の在原業平の和歌と思われるものが随所に組み込まれているために、一見在原業平の一代記風の長編的な仕立てに見える。しかしその実、個々のエピソードは一人の実在の人物の事績としてはおよそ不可能でしかないほどに脈絡を欠いてもいる。単独の人物の事績としては脈絡を欠いて矛盾であっても、全編が短編の累積という形態をとるために、その矛盾を追及せず許容し得るのが歌物語の形式なのである。一方『源氏物語』の場合は、あくまでそれが長編物語であるために、一人の男の人生としての整合性が求められてくる。『伊勢物語』においては個々の章段が短編的に独立しているために矛盾に見えなかったものが、『源氏物語』では光源氏の一人に負わされるために、無軌道で乱脈な恋の遍歴という側面がより強調されてしまったのである。

## 二 『伊勢物語』の編纂に見られる類聚性

さてそれでは『伊勢物語』が、一人の男の実人生としてはあり得ない恋の物語を集めたものであるとすれば、どのような原則で物語を蒐集したのであろうか。そこには同類のものを集めるという発想、いわゆる「類聚」といった編纂意識があるのではなかろうか。いま仮に通行の本文における二一段から二四段までに配列された四つの小話を取り上げて、具体的にその様相を確認したい。

『伊勢物語』二一段から二四段は、いずれも夫婦もしくはそれに近い男女の、関係の危機と

その後の物語である。二一段は何らかの理由で別れた男女がいったん縊りを戻すものの再び別れるという展開であり、続く二二段は別れた男女が縊りを戻し仲良く添い遂げることを予感させて終わっている。

まずは二一段を見てみよう。

むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、こと心なかりけり。さるを、いかなることかありけむ、いささかなることにつけて、世の中を憂しと思ひて、いでていなむと思ひて、かかる歌をなむよみて、物に書きつけける。

いでていなば心かるしといひやせむ世のありさまを人はしらねば  
とよみ置きて、いでていにけり。この女、かく書き置きたるを、けしう、心置くべきこともおほえぬを、なにによりてか、かからむと、いといったう泣きて、いづかたに求めゆかむと、門にいでて、と見かう見、見けれど、いづこをはかりともおほえざりければ、かへり入りて、

思ふかひなき世なりけり年月をあだに契りてわれやすまひし  
といひてながめをり。

人はいさ思ひやすらむ玉かづらおもかげにのみいとど見えつつ  
この女、いと久しくありて、念じわびてにやありけむ、いひおこせたる。

いまはとて忘るる草のたねをだに人の心にまかせずもがな  
返し、

忘れ草植うとだに聞くものならば思ひけりとはしりもしなまし  
またまた、ありしよりけにいひかはして、男、

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき  
返し、

中空にたちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな  
とはいひけれど、おのが世々になりにければ、うとくなりにけり。

互いに思いを交わして不満もなかったはずの男女が、「いかなることかありけむ」、いったい何があったのか、ほんの些細なきっかけで「世の中を憂し」、二人の関係を嫌だと思って片方が歌を残して家を出たのだという。出ていったのが男か女か非常にわかりにくい文脈だが、女が出て行ったとするのが通説である。残された男は、「けしう、心置くべきこともおほえぬを、なにによりてか、かからむ」と、理由のわからぬままに、いったいなぜかと動揺し、ひどく泣いて茫然自失としながら歌を詠む<sup>(6)</sup>。すると随分時を経て、出て行った女が歌を寄越し、これに男が応じて、一度は関係が復活するかに見えるが、結局それぞれの生活に戻って別れてゆく、という展開となっている。ここでは両者が共感を交わし合う第四首目と第五首目の贈答歌の間には、「忘るる草」「忘れ草」といった語彙の照応が見られ、第六首目の男の贈歌「忘るらむ」へと繋がるが、第七首目では第六首目の表現にはもはや連動せず、この男女の破局を象徴するかのようになっている。

それでは続く二二段はどうか。

むかし、はかなくて絶えにける仲、なほや忘れざりけむ、女のもとより、

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつつなほぞ恋しき

といへりければ、「さればよ」といひて、男、

あひ見ては心ひとつをかはしまの水の流れて絶えじと思ふ

とはいひけれど、その夜いにけり。いにしへ、ゆくさきのことどもなどいひて、

秋の夜の千夜を一夜になずらへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ

返し、

秋の夜の千夜を一夜になせりともことば残りてとりや鳴きなむ

いにしへよりもあはれにてなむ通ひける。

他愛もなく関係が絶えてしまった男女が、それでも心が残ったのか、女の側から未練を訴える和歌を送って寄越すと、男はそれに応じて関係を復活させ、共寝の夜に互いに名残の尽きないことを贈答して物語は終わる。第三首目、第四首目の贈答歌が「秋の夜の千夜を一夜になむ」と長大な共通表現を抱えるのも、両者の共感を象徴させるためであろう。

二一段、二二段はともに、男女の関係の危機を巡る和歌の贈答を中心とした小話であるが、いずれの章段でも地名や事の経緯といった具体相は明らかにされず、ただ両者の近づき離れる関係を追うのみである。この二つの章段の、全く異なる展開を生きる男女が、同一の夫婦だとはおよそ考えにくい。むしろ二二段に男女が別れる経緯が描かれていないことからすれば、二一段の男女が別れたその後の展開を、もう一つの可能性として提示したのが二二段であるかのような位置づけである。関係の危機を迎えた男女のさまざまな様相を描く物語を蒐集する中で、二一段には最終的に別れる男女の物語が、二二段には縊りを戻して添い遂げると見える男女の物語が据えられたのではなかろうか。二つの物語の個別性は、話の展開とともに、贈答歌の表現の固有性をもって味わられる趣向なのである。

これに続く二三段はもはや本文は省略するが、有名な筒井筒の章段である。幼馴染の少年少女の恋が実って結婚するものの、女の家没落を機に、男は高安の地に新たな妻をもうけて通い始める。不満も漏らさず送り出す元の妻に不審を抱いた男が、出かけたふりをして様子がかがっていると夫の無事を祈る歌を詠んでいる、その健気さに心打たれて元の鞘におさまる。とはいえやはり高安の女も気にかかり様子を見に行くと、その無風流を目の当たりにして未練をなくす、という展開である。また二四段は、宮仕えのために旅立った夫が三年経っても戻らないため、新たな男と新枕を約束したその夜に、元の夫が帰ってくる。元の夫は女の新しい人生を祝福して自らは立ち去るが、女は元の夫への思いに耐えかねて復縁を願って追い、しかし思いはかなわず女は独り死ぬという展開である。

これら二一段から二四段はいずれも、破局の危機に直面した男女のその後の諸相であって、同一の男女間の経験とはおよそ考えにくい。ここには『古今集』に入集する業平の歌も含まれず、もともと業平には無縁の一群と思われる。それではどのような基準でこれらの章段がここに据えられたのだろうか。おそらく、まずこの中の一つの章段があって、その展開だけでは飽き足らず、あり得たかも知れない別の可能性を別の章段で補おうと、男女の危機の後の多様な

展開を蒐集したのではなかろうか。『伊勢物語』は一般に、単一の作者によって一時に成ったものではなく、数十年の時を経て増益したと考えられているが<sup>(7)</sup>、その章段増益の過程において、近接する箇所類似の章段を並べることが方針の一つだったと考えられる。類似の物語をいくつも集めることによって、一つの状況から派生する可能性が様々に模索され、多様性が追求されたのだといえよう。

類似の物を集めることを類聚という。『枕草子』などには、たとえば「虫は」の書き出しで、虫の名を列挙し寸評する類の章段もあって、類聚章段などと称されたりもする。同種の属性の物を集めるという発想による編纂は、唐代の類書の影響を受けて、平安期に模倣されて発展した<sup>(8)</sup>。九世紀末には菅原道真編の『類聚国史』、十世紀に入っては源順の『和名類聚抄』、中期には編者不明の『古今和歌六帖』などが編まれ、題ごとに事項や和歌等を分類する編纂方法が定着していった。このような編纂意識の物語における実践が、先の二一段から二四段までの一群ではなかろうか。『伊勢物語』には二条后への恋に破れた結果、都にいられなくなって東下りをする男を描くが、その東下りの一群も、必ずしも時系列的な進展に支えられているとは言い難い、異伝とも何ともつかない章段を含んでいる。『伊勢物語』は、次第に業平の一代記としての長編性をもって享受されていくが、本来は長編を志向する直線的な進行を軸とするベクトルと同時に、似たものを集める発想、横への広がりをも探求したものでもあった。その横への広がりともいえる類聚性こそが、一元化を回避した価値の多様性、複眼性を物語に約束したのだと言えよう。

### 三 光源氏の多様な恋の物語

このような問題意識からすれば、そもそも光源氏にまつわる多くの恋の挿話が描かれること自体、多様な恋の物語を集めるという類聚性によるものなのだとまずは言うておこう。ドンジョバンニのカタログの歌よろしく、「恋のカタログ」としての側面があるというわけである<sup>(9)</sup>。藤壺、葵の上、紫の上をはじめ、空蝉、夕顔、末摘花、朧月夜、六条御息所、朝顔姫君、花散里と、それぞれの造像は巧みに描き分けられており、あたかも実在の個としての人物がありありと想像できるかのようでさえある。しかし物語の作中人物はあくまで実在の我々とは次元の違う、虚構の中に造られた存在である。そうである限り、いかに巧みにその個性が描き分けられていようとも、所詮は造られた存在であることを免れない。そのために往々にして個々の作中人物は、きわめて機能的な存在となっていく。

こうした着眼からすれば、一人の作中人物の上に描かれたことが、その作中人物の個的な存在とは必ずしも因果づけられきらず、あるいは他の作中人物の何かを代弁する、といった役割性を見出すこともできよう。個々の女君の描写が、各々で完結するのではなく、Aの人物描写を通してBの内面が補われる、といった具合に、物語中における役割が個としての人物の自律性を食い破る場合がある、ということになろうか。

一つ典型的な事例を掲げてみよう。作中の最も重大な事件である光源氏と藤壺との密通に關

しては、さまざまな問題がある。たとえば若紫巻に描かれる両者の逢瀬の場面は、あまりにも具体性を欠いて、ただ光源氏の憧れだけが先行しているようであるし、不義の子を桐壺帝の子と偽り続ける藤壺の内面の葛藤は、紅葉賀巻にわずかに触れられる程度で、ほとんど深化していかない。桐壺帝は藤壺と光源氏との関係に気づいているのか否か。藤壺と光源氏は、二人の密通と不義の子誕生に関してどのように内省していくのか等々の重大事について、この物語は必ずしも雄弁ではない。

若紫巻における二人の逢瀬の場面を取り上げたい。

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上のおぼつかながり嘆きこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、かかるをりだにと心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにももうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いかがたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおほえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深く思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深く恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむと、つらうさへぞ思さる。

何ごとをかは聞こえつくしたまはむ、くらぶの山に宿もとらまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさまうなかなかなり。

見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな  
とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても  
思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などはかき集めて来たる。  
(若紫巻・①二三〇―二頁)

通常ならば男女の逢瀬には不可欠な景物表現がほとんどなく、「あやにくなる短夜」から夏だと知れるのみである。突然の光源氏の訪問に当惑する藤壺の心情は、「宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深く思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なる」とあるが、これ以上藤壺の思念が深まることはなく、「なつかしうらうたげに、さりとてうちとけず心深く恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させたまはぬ～」と、光源氏が藤壺の様子を見て魅了される叙述に収斂されてしまう。かろうじて両者の贈答歌に、夢に耽溺するように逢瀬の余韻に浸る源氏に対して、世間の噂になることを怖れる藤壺の心情が示されているだけである。これは、光源氏との重要な逢瀬の場面の描写としてはいかにも短く、当時の読者にも、もっと両者の心情を克明に知りたいと感じさせたのではなかろうか。この場面については、『伊勢物語』六九段、伊勢の斎宮との密会の物語からの、設定や表現の上での強い影響が指摘されているが、そもそも六九段自体が具体相を多くは語らず、臆化された点の多い物語なのである。多く語らないことが奥ゆかしいのだろうが、描き残された感も否めない。

こうした物語の描き方に対するある種の不満はしかし、別の形で補われる。すなわち他の女君との関係を通して代償的に描かれる、ということなのではなからうか。たとえば空蟬の物語は、中流貴族で父を亡くし老いた受領の後妻となっている女が、方違えのために邸に身を寄せた光源氏に深夜忍びこまれ、関係を持たざる得なくなるという展開がそれである。傍線部は女の側の視点から描かれていると思われる箇所である。

「中将召しつればなむ。人知れぬ思ひのしるしある心地して」とのたまふを、I ともかくも思ひ分かれず、物におそはるる心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて音にも立てず。「うちつけに、深からぬ心のほどと見たまふらむ、ことわりなれど、年ごろ思ひわたる心の中も聞こえ知らせむとてなむ。かかるをりを待ち出でたるも、さらに浅くはあらじと思ひなしたまへ」といとやはらかにのたまひて、鬼神も荒だつまじきけはひなれば、II はしたなく、「ここに人」ともえののしらず。心地、はた、わびしくあるまじきことと思へば、あさましく、「人違へにこそはべるめれ」と言ふも息の下なり。消えまどへる気色いと心苦しうたげなれば、をかしと見たまひて、「違ふべくもあらぬ心のしるべを、思はずにもおぼめいたまふかな。すきがましきさまには、よに見えたてまつらじ。思ふことすこし聞こゆべきぞ」とて、いと小さやかなれば、かき抱きて障子のもと出でたまふにぞ、求めつる中将だつ人来あひたる。……（中略）……女は、III この人の思ふらむことさへ死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いとなやましげなる、いとほしけれど、例の、いづこより取う出たまふ言の葉にかあらむ、あはれ知るばかり情々しくのたまひ尽くすべかめれど、IV なほいとあさましきに、「現ともおほえずこそ。数ならぬ身ながらも、思しくたしける御心ばへのほどもいかが浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなる際は際とこそはべなれ」とて、かくおし立ちたまへるを深く情なくうしと思ひ入たるさまも、げにいとほしく心恥づかしきけはひなれば、「その際々をまだ知らぬ初事ぞや。なかなかおしなべたる列に思ひなしたまへるなむうたてありける。おのづから聞きたまふやうもあらむ、あながちなるすき心はさらにならはぬを、さるべきにや、げにかくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、みづからもあやしきまでなむ」など、まめだちてよろづにのたまへど、V いたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えたてまつるとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり。（帚木巻・①九九——一〇一頁）

これは二人の逢瀬の長大で克明な描写の、ごく一部に過ぎない。忍びよった光源氏が、女房の中将（女房の呼び名）をお呼びだから代わりに中将（光源氏の官職名）の私が来ましたよ、などと女に近づくと、I 「ともかくも思ひ分かれず、物におそはるる心地して、「や」とおびゆれど、顔に衣のさはりて音にも立てず」と、女は急に物に襲われたかと動転するが声にもならない。長年思い続けていたのだと柔らかに語りかける光源氏の様子は「鬼神も荒だつまじきけはひ」とこの世の者でないものまでも魅了するほどで、II 「はしたなく、「ここに人」ともえののしらず。心地、はた、わびしくあるまじきことと思へば、あさましく、「人違へにこそはべるめれ」と言ふ」と、女は声を立てて人を呼ぶこともできず、かろうじて「お人違いでしょ

う」と抵抗することだけである。やがて呼んでいた女房の中将が戻って来ると、女はⅢ「この人の思ふらむことさへ死ぬばかりわりなきに、流るるまで汗になりて、いとなやましげなる」と近づいてきた女房の中将がいかにも思っているかを想像するだけで耐えがたい。するとどこから出た言葉か、光源氏は言葉巧みに口説いてくる。女はⅣ「なほいとあさましきに、「現ともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思しくたしける御心ばへのほどもいかが浅くは思うたまへざらむ。いとかやうなる際は際とこそはべなれ」とて、かくおし立ちたまへるを深く情なくうし」と、取るに足らない身の上を見下した振舞いには応じきれないと毅然と振舞おうとし、光源氏の振舞いをつらく思っている。その様子を光源氏は、「思ひ入りたるさまも、げにいとほしく心恥づかしきけはひ」と、かわいそうに、こちらも気恥しくなるほどの毅然とした様子と見て、真面目に誠意を尽くして説得するものだから、女はⅤ「いとたぐひなき御ありさまの、いよいようちとけきこえむことわびしければ、すくよかに心づきなしとは見えたとまつとも、さる方の言ふかひなきにて過ぐしてむと思ひて、つれなくのみもてなしたり」と、光源氏の立派な様子に魅了されるがゆえに、所詮自分は情の強い女だと思われても靡かない方がよいのだと心に決めて身を許そうとはしない。しかし結局のところ、光源氏と結ばれてしまう。

IからⅤの傍線部は、女に寄り添う視点からの描写で、この物語の第一部の全体的傾向に比して、女性側に寄り添った叙述がきわめて多い。突然に目の前に現れた男との予期せぬ時を共にする女の動揺と葛藤、女から見た光源氏の様子が、詳細に描かれているのである。

このような空蟬と光源氏の場面描写は、成立の順序は定かではないものの、現行の巻の秩序に従えば藤壺との逢瀬に先立って描かれている。この空蟬との場面をもって、藤壺との密会の場面を補完して読もうとする解釈もかつて提起されたことがある<sup>(10)</sup>。藤壺と光源氏との詳述されざる逢瀬の内実を、空蟬とのそれによって類推したくなるのは、両者の属性に似通うところがあるからでもある。いずれも既に夫のある身でありながら、心ならずも一度は光源氏と関係を持ち<sup>(11)</sup>、内心は光源氏に魅了されながらも再びは身を許そうとはせず、晩年は出家をして光源氏の庇護を受けるといった展開を抱えるからである。藤壺も空蟬も年の離れた夫には先妻との間に男子がおり、夫の没後その継子の男子の懸想を受けることを機に出家するという点でも、展開の相似は著しい。とはいえ、もとより両者の間には決定的な隔たりもある。藤壺は先帝の娘と出自も高く、桐壺帝の寵愛を受けてやがて中宮となる高貴な身の上であり、対する空蟬は中流貴族の娘で、夫は受領に過ぎない。その意味では、光源氏と関わった両者の心情を全く同一視するのは、いささか乱暴過ぎる面があることも否めない。

このように、身分が全く異なる別人ながら、あまりによく似た点を抱える複数の人物が一つの物語に組み入れられているところには、描かれざる藤壺の心情を空蟬の物語によって代弁させるといった側面も見取れよう。そこには、個々の人物が個性的であることは価値の一面に過ぎず、むしろ類型を繰り返すことを通してより詳細な何事かを伝えようとする、物語の方法が見取れるのではなかろうか。すなわち『伊勢物語』に見られたような、あえて似た話を蒐集する類聚の発想が、ここには認められると考えるのである。だとすれば、作中の一個の人物は、自律的にあるのではなく、他との関係によって均衡を図り、相対的に造られた存在なのだ

ということになる。『源氏物語』には、個々の作中人物を軸に論じる作中人物論という分野があるが、それについてはかねてより、個々の人物造型と物語の主題との相関を考える必要が提案されている<sup>(12)</sup>。藤壺の物語と空蝉の物語に相補性を認めるところからは、さらには個々の作中人物の機能的役割性といった課題へと議論を推し進めることができるように思われる。

#### 四 光源氏の密通への内省

こうした問題意識の延長上に、たとえば光源氏と藤壺との関係を考えることもできよう。光源氏は父の桐壺院の寵愛する藤壺と密会をし、不義の子を為し、その子は父桐壺院の子として育てられる。しかしその重々しい関係については、『源氏物語』を読む限り、光源氏の内面描写の形では、藤壺との関係に対する反省的な思いや悔恨、いわゆる罪の意識というようなものは、あまりはっきりとは描かれない。そのような物語の描かれ方も、場面の類聚性といった観点からいくらか理解できるのではなかろうか。

夕顔巻では、五条に住む女との利他的な恋に耽溺した揚句、女は共寝のさなかに頓死するのだが、その際に光源氏は、「わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり……」（①一六九頁）と、目前の夕顔の死を、おそらくは「おほけなくあるまじき心」と藤壺との恐れ多い許されない恋の報いと捉えている。また不義の子と初めて対面した折に、父の桐壺帝に、不思議にお前によく似ていると言われて、「面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して」（①三二九頁）と思ひ乱れる様子が描写される場面もある。しかしこれで十分に反省的かといえ、どこか物足りなさも残る。

かねて指摘されることだが<sup>(13)</sup>、密通の露見への恐れは、物語には別の場面、別の設定で代償的に描かれているとも言えよう。次は光源氏が源典侍に声をかけ、戯れる様子を父桐壺帝に見られる場面である。

上の御梳櫛にさぶらひけるを、はてにければ、上は御桂の人召して出でさせたまひぬるほどに、また人もなくて、この内侍常よりもきよげに、様体頭つきなまめきて、装束ありさまいとはなやかに好ましげに見ゆるを、さも古りがたうもと心づきなく見たまふものから、いかが思ふらんとさすがに過ぐしがたくて、裳の裾を引きおどろかしたまへれば、かはほりのえならず糸がきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて、いみじうはつれそそけたり。似つかはしからぬ扇のさまかなと見たまひて、わが持たまへるにさしかへて見たまへば、赤き紙の映るばかり色深きに、木高き森のかたを塗るかへしたり。……（中略）……「まだかかるものをこそ思ひはべらね。今さらなる身の恥になむ」とて、泣くさまいといみじ。「いま聞こえむ。思ひながらぞや」とて、ひき放ちて出でたまふを、せめておよびて「橋柱」と恨みかくるを、上は御桂はてて、御障子よりのぞかせたまひけり。似つかはしからぬあはひかなと、いとをかしう思されて、「すき心なしと、常にもて悩むるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」とて笑は

せたまへば、内侍は、なまはゆけれど、憎からぬ人ゆゑは濡れ衣をだに着まほしがるとぐ  
ひもあなればにや、いたうもあらがひきこえさせず。(紅葉賀・①三三六―八頁)

源典侍は六〇歳間近の老女であるが、桐壺帝の傍近く仕え、その身边を世話する女官である。ここでは光源氏の軽いからかいに応じて色目を使い、年甲斐もなく女の側から積極的に迫ってくる。その派手な装束といい、女の振舞いにしては尋常ならざる積極性といい、すでに当時の常識的な貴族の風流の観念からは逸脱している。さしずめ『伊勢物語』六三段に象徴されるような、〈をこ〉の物語の一つとしての老女の恋の物語であろう。しかし、問題はその様子を見ている桐壺帝の視線である。「すき心なしと、常にもて悩むめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」と、日頃は光源氏は真面目過ぎて好色事にも関心がなくつまらないと人々が不満そうに言うのに、やはりこんな遊び心もあるんだね、と桐壺帝は笑っている。この場面は、それ以上の深刻な展開を何らもたらすことはない。しかし、かつては桐壺帝と関係した事もあったと想像される源典侍が、新たに光源氏との恋に興じ、それを桐壺帝が観察しているという状況からすれば、重すぎて描くことのできない藤壺との関係の露見の代償として、この場面を位置づけることもなるほどできよう。

さらには、桐壺帝が光源氏の好色の噂を耳にして叱責する場面もある。

A内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるることも、げに。

ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、などか情けなくはもてなすなるらん」とのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御答へも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思しめす。さるは、すきずきしうち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずなども見え聞こえざるを、「いかなるものの隈に隠れ歩き、かく人にも恨みらるらむ」とのたまはす。(紅葉賀・①三三四―五頁)

B「故宮のいともむごとく思し時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすなるがいとほしきこと。斎宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまかせてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など、御気色あしければ、わが御心地にもげにと思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨みな負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしければ、かしこまりてまかでたまひぬ。

(葵巻・②一八―九頁)

Aは、光源氏が左大臣の娘の葵の上のもとへの通いが途絶えがちで、二条院の誰だかが引きとめているらしいと耳にした桐壺帝が、光源氏を叱責する場面である。また、Bは、六条御息所との恋が噂になっているにもかかわらず、女に対する処遇が充分でないことを叱責する場面である。いずれも本来、光源氏に重んじられてしかるべき社会的立場、高い素姓にある女君が、それにふさわしい寵愛を光源氏から受けられず、その噂を耳にした桐壺帝が叱責したものといえよう。これらはとりわけBの場面の末尾で光源氏自身が、「けしからぬ心のおほけなさを聞

こしめしつけたらむ時と恐ろしければ」と藤壺との秘密の関係がもし発覚したらと恐懼するように、起こるかもしれない藤壺との秘事発覚への恐れを光源氏に植え付けるための場面設定だと考えられよう。

藤壺との秘事がもし発覚してしまえば、不義の子が帝になり、その実父として栄華をほしいままにする光源氏の栄耀栄華は成り立たない。『源氏物語』の初期の物語は、優れた資質を持ちながら臣下に下らされ、帝になる可能性を限りなく失った光源氏が、いかにして帝の位に接近するか、というサクセスストーリーを軸とするために、その達成のために不要な要素は物語に詳述されず、排除されていく傾向が著しい。従って、藤壺との関係それ自体を世間に露見させるわけにはいかないのである。そのために、源典侍との関係の桐壺帝への露見や、葵の上や六条御息所の処遇に関わる桐壺帝の叱責を通して、深化させられない藤壺との罪の追及を代償させる側面があるのではなからうか。さらには、朧月夜との関係の発覚による須磨退去という展開にも、同様の代償性が認められるのは、言うまでもない。

相互に補完し合うように人生の断片が切り出され、ある人物の事績としての描写が、別の人物の上の描かれざる何事かを埋め合わせる想像力を喚起するという手法、それは、物語が短編から長編へと成長する中で学んだ、類聚的な要素を長編に組み入れることで、あり得たもう一つの可能性を想像させるという手法であったと思われる。似た場面、似た状況を繰り返しながら、別の場面に描かれなかったもう一つの物語を想像させようとするのである。似た人間関係、似た場面の繰り返し、その類型性は、近代的な価値観からすれば負の評価を受けかねない。しかしながら古代の文学においては、その類型性によって何事かを伝える方法があったのだと思われる。

『源氏物語』には何度も密通事件が描かれるが、その中でとりわけ重大な二つと言え、一つは光源氏と藤壺との密通、いま一つは柏木と女三宮とのそれであろう。しかしそれらは物語引用ともいえる反復の側面を抱えながらも、単なる因果応報とは言えない重大な質的差異を抱えている。最初の密通については、桐壺帝がそれを知っていたかどうか定かでなく、作中の叙述を辿る限りではあたかも知らなかったかのように見える一方で、柏木と女三宮の密通は、明らかに光源氏の知るところとなり、不義の子と知りながら我が子として手に抱く苦悩を味わわざるを得ないからである。そのような経験に立って初めて光源氏は、「故院の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へば、その世のことこそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ、と近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心まじりける」（若菜下巻・④二五五頁）と、もしかすると父の桐壺院は知っていたのだろうか、という疑念に思い到ることになる。その恐ろしい想像を通して、青年期の光源氏の栄華を成り立たせていた様々な要素が、一転不幸の姿をもって襲いかかって来るのが、第二部の光源氏の生なのである。

あるいはその光源氏と藤壺との不義の子である冷泉帝は、自らの出生の秘密を知った時に、光源氏をしかるべき形で処遇せねばと思うだけで、自らの実存の不安を問い詰めることはない。その時点でもし冷泉帝が出家でもしたならば、光源氏の栄華の物語に未来はないからであ

る。しかし、そこで棚上げされた不義の子の苦悩という課題は、宇治十帖の物語の原動力となった。すなわち第二の密通、柏木と女三宮の不義の子である薫は、その出生の秘密ゆえに、自らの日常的な栄華に酔いしれることができず、仏道に惹かれ、宇治に通い、没落皇族である八宮一族との交流に心の拠点を見出すしかない。そのような歪んだ生の均衡は、冷泉帝の上には描くことが許されない課題であった。ここに、ある人間関係では選択させられなかった、描き切れなかったもう一つの人生の可能性を、別の人物の上に似た状況を設定することで追及する、という方法が認められるのである<sup>(14)</sup>。

すなわちこのようにして、物語は短編から長編へと成長を遂げたのであろう。類聚の意識によって、さまざまな人生の可能性を並列的に集めた短編物語集の歌物語は、巨大な長編物語『源氏物語』の成立によって、その様式を文学史上から消した。それは、『源氏物語』が様々な意味で、歌物語の達成を汲み上げたためであったと思しい。短編の類聚性——いわば横に並列的に並べる方法を、長編における反復——いわば縦に並べ直す方法に汲み上げ直すことで果たした文学史的達成でもあったのである。

## 註

- (1) 工藤重矩『平安朝の結婚制度と文学』（風間書房、1994年）
- (2) 増田繁夫『平安貴族の結婚・愛情・性愛 多妻制社会の男と女』（青簡舎、2009年）
- (3) 折口信夫「国文学」（『折口信夫全集 十六』、中央公論社、1996年）、鈴木日出男の一連の「色好み」論（『源氏物語虚構論』東京大学出版会、2003年）
- (4) 「まこと、この世の中に恥づかしきものとおぼえたまへる弁の少将の君、世人は、交野の少将と申すめるを」（『落窪物語』巻一、九〇頁）、「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなれば、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし」（同巻一、九三頁）
- (5) 秋山虔「好色人と生活者——光源氏の「癖」」（『王朝の文学空間』東京大学出版会、1984年）
- (6) 平安朝の文学では男が泣くのは珍しくない。
- (7) 片桐洋一のいわゆる三段階成立論。『伊勢物語の研究 研究篇』（明治書院、1968年）
- (8) 高橋亨「歳時と類聚」（初出1999年10月、『源氏物語の詩学』名古屋大学出版会、2007年）
- (9) 鈴木日出男『はじめての源氏物語』（講談社現代新書、1991年）
- (10) 岡一男『『源氏物語』のテーマ・構想・構成』（『源氏物語の基礎的研究』東京堂、1966年）
- (11) 藤壺との関係は、若紫巻以前にすでにあったとする説もある。
- (12) 森一郎「源氏物語における人物造型の方法と主題との連関」「源氏物語の人物造型の問題」（『源氏物語の方法』桜楓社、1969年）など。
- (13) 三谷邦明「源典侍物語の構造——織物性あるいは藤壺事件と朧月夜事件——」（『物語文学の方法 II』有精堂、1989年）
- (14) 高木和子「源氏物語のからくり——反復と遡上による長編化の力学——」（『國語と國文学』2010年4月）

※本文はすべて、新編日本古典文学全集によったが、私意により表記を一部改めた。